



生きている 兵隊

【伏字復元版】

石川達三

Tatsuzo Ishikawa

中公文庫

「平尾、芸者買ひに行こう」

「芸者か、あの漢口帰りのやつか。うむ。どこに居るか貴様知つとるのか」「知つとるさ。今日酒保の親爺に聞いた」

「どの辺だ」

「酒保の近処だ」

「行つてもいいが……待て、拳銃を借りて来る」

近藤はなにか昂然としていた。というよりむしろ焦立つていた。彼は右の拳で頭をこつこつと叩きながら待っていた。平尾は夜道を帰るときの用心の為に通訳が持つている支那兵からぶん取ったモーゼルの大きな古めかしい拳銃を借りに行つた。

「今晩は。拳銃貸して呉れんか」

通訳は笠原伍長と従軍僧と一緒に紫金山の激戦の話や聯隊旗手の戦死の話を喧しく語りあつていた。

「今からどこか行くのかね」通訳は徵發品の赤い縞のある婦人用のタオル寝巻を着ていた。

「うむ、芸者買ひに行く。君なんか子供だから来ちゃいかんぞ」

「おい、一等兵！」笠原がとんでもない声で叫んだ。「貴様、誰の許可を得て行くか」「許可は得なくともかまわんです」

「馬鹿！ 下士官の引率でなくては芸者買ひは許さんちゅう事を知らんか」「知りません。そんなことはないです」

「ある。貴様だけでは外出許さんぞ、笠原伍長が引率して行くなら宜し。あははははは。さあ、行こう」

通訳たちに笑われながら二人は室を出て近藤と一緒になつた。そういう場合には階級の差はお互いに忘れて樂々と遊ぶのが兵隊の常識であつた。三人は黄昏近い衛門を出て大通りを歩いて行つた。夕飯後は街を歩く兵の数もほとんど無くて、二三ヶ所の

火事明りが遠近に見えていた。他は殆んど灯の光りの射さない暗黒の街であつた。

酒保までは十町ばかりもあつた。二人はしきりと雑談をしながら歩いていたが、近藤だけは一步後れて話の中にも加わらないでいた。軽いけれども不快な頭痛がある。風邪を引いたようでもあつた。しきりにもう一度上海へ行きたい気がしてならなかつた。両側の家々は大方焼け崩れていて、風が吹くと庇からぶら下つたトタン板ががらがらと鳴り、ネオンの硝子管が砕けてからからと鋪道に落ちて来た、星が冴え空気は鋭く冷えはじめていた。

酒保はもうすっかり表戸を閉めていた。中山路に突き当つて左へ曲る。人影もない。この大通りを装甲自動車が砂塵を捲いて走り去つた。そのあとには軍官学校の長い煉瓦塀が黒々と続いていて、塀に横一列に書いた大きな字が白く夕闇に浮んで見えていた。

要恢復民族地位、必須要個有的道德做基礎、忠孝・仁愛・信義・和平、是中華民族個有的道德。總理遺訓。

提倡國貨發展實業是富國裕民的根本弁法。新生活運動是復興民族運動。國民要以『实事求是』与『日新又新』的精神、力行新生活。蔣委員長名言。

塀が終つたあたりで近藤はまた左へ廻つた。このあたりだという。搜して見るとすぐ分つた。道の一方は全く崩れ落ちた屋並みで他の側だけは元のままに立つていて。その中の一軒に灯がついていた。立派な建物で門扉は半ば閉ざされ中庭の植込みが丸く茂つた所に一株の臘梅が一ぱいに花をつけていた。

中庭に入ると二階から談笑する人たちの声が聞えてたしかにこの家であつた。彼等は階段を上つて玄関に入つて見た。硝子戸の中に日本人の五十近い老女の顔が見えた。明らかに芸者屋の女将という恰好の女であつた。彼女は笠原の声を聞くと蠟燭を持つて玄関に出て來た。

「いらつしやいませ」

「おばさん、酒飲めるかねえ」と笠原が言つた。

「はあ、あの、二階のお座敷が一杯なんですが、下でも宜しゆうござんすか。下は椅子ですけどねえ」

「いい妓が居るのかねえ」

「はあ居りますよ」

老女は暗い土間の下駄を探つて廊下づたいに三方窓になつた洋室に案内しテーブルの上に蠟燭を立てながら独りごとのようすに言つた。

「電燈がないんで本当に不便ですよ。ほんとに飛んでもない所へ来てしましたよねえ。お料理も何も出来ませんし、まだねえ。お酒は沢山着きましたけれど。今晚は寒いようですわね。すぐ火を持つて参りますから」

笠原は黙つて聞いていたが彼女が去ると、日本人の女の声を聞くのは大連以来だなあと懐しそうに呟いた。

馬鹿に寒い室であつた。どこかから風が来ると思つて近藤がふり向くと庭に面した窓硝子が一枚壊れて暗い穴があいている。その穴から白い大きな猫が鋭く眼を光らせて彼の顔を睨んでいた。

「畜生！」

彼は叫ぶと一緒に腰に手をやつて拳銃を握つた。猫はふり向いて音もなく庭にとび下りてしまい、そのあとの四角な穴が気味悪く暗かつた。

「あいつ、どこかで人間を食つてきやがつた」彼は襟元に悪寒を感じてそう呟いた。何か嫌な幻影がしきりに眼の前に浮んで来るようでたまらなく不快であつた。ずつ

と前にスパイの女を短剣で突き殺した、あの女の幻影のようでもあつた。彼が猫を撃とうとした拳銃はその女の持つていたものである。装填してある弾丸もその時のものである。

「俺はどうも熱があるようだ。風邪をひいたらしい」

笠原はふり向いて揺れる灯のかげに彼の白い額を見た。

「酒飲めば治る」彼はこともなげに言つた。「死んだらみんなして焼いてやる。火葬なら馴れたもんだ。なあ平尾」

近藤はふと笠原伍長に嫌悪を感じた。彼はずつと前から人間の命を軽蔑し切つている、支那兵をも、そして勿論笠原自身をも。それを俺にもあてはめようとするのか、と近藤は思つた。焦立たしい混乱が来た。それにこの室が暗いのだ。市政府で電燈をつけているのにここではただ一本の蠟燭しかなくて室の隅の方には冷え冷えとした影が淀んでおり、戦場の鬼気が室一ぱいに立ち罩めているようだ。

華やかな和服を着た若い芸者が一人、炭火を持ち酒を捧げ下駄を鳴らしながら入つて來た。扉の暗がりに立つた女の姿と化粧した白い顔とを見たとき、近藤は明らかに幽霊だと思つた。このような女がこの裏廻の死鄧に居るとは言じられなかつた。その

印象は平尾にも笠原にも同じであつた。こういう場合、着飾つた女というものは、一種不気味な恐ろしいものでさえもあつた。

三人は静かに酒をのみはじめた。灯の暗さが座を浮立たないものにしているようであつた。二階の日本座敷からは兵隊の歌う軍歌がきこえていた。いくさする身はかねてから死ぬる覚悟でいるものを、という歌である。歌の調子の明るさと勇ましさとがここでは却つて不調和であつた。そして歌のとぎれたじしまには遠くからたたた、たたたたと機関銃をうつ音が聞えて來るのであつた。

銚子を幾度かとりかえているうちに平尾が酔いはじめ笠原も姿勢をくずしはじめていた。肴は上海から持つて来たという鰯の味淋ぼしと鰯と飯蛸の鐘詰め、蜜柑といふ風な、まるで料理屋の形にはなつていなかつた。女の手首には霜やけが黒く痣になつていて、近藤は盃に酒を受けながら、その手首にふと死体を見るような気味悪さを感じた。

「どうも俺は熱があるようだ。何だかひどく疲れてる」

彼は深い椅子の背に頭をもたせかけて天井を仰いだ。高い天井はやや黒くすんで、

蠟燭の灯が揺れると怪しい隈が動いていた。彼は不思議にあのスペイの女の真白い肉体を幻に描いていた。胸に刺された短剣につかまつてもがき苦しんでいた時のうねるような波打つような白い肉体の動きである。不意に彼はむらむらと女を殺したくなりはじめた。自分でも恐ろしいほど兇暴な胸が熱くなるような感情であった。彼にはそれが一種の神經衰弱であるかまたは鬱積した慾情の為であると思われた。彼はがぶがぶと盃をあおりながら、やや酔つて小声で歌をうたつている平尾の顔をふり向き、蒼ざめた笑いをうかべて言つた。

「俺あまた女を殺したくなつて來た」と
すると芸者が横から口をはさんだ。

「わたしも女よ。こわいこと言わないでよ」

「貴様を殺してやろうか」

近藤は酒の為にかえつて青くなつた顔に微笑をうかべ女の顔を見ながら腰のピストルを抜いて威嚇的にテーブルの上に置いた。

「女と言えば平尾、お前があすこで殺した、ほら、母親の死体につかまつて泣いてたやつよ、あれは凄かつたな！」

笠原がややもつれた舌で言つた。

「あれはいやだ、あれだけは今でも嫌だ。あの場合何とも仕様がなかつたけどなあ。あれは可哀そだつた」

平尾は苦しそうに笑つてから芸者に向つてその時の話をやや誇張的に話しあげた。

近藤はまたぞッと背筋に悪寒を感じた。何故か彼はふとふり向いて窓を見た。また猫が来ているのだ。

彼は突然拳銃をつかんで立ち上つた。しかし彼がかまえるより先に猫はまたひらりと外の闇に消えて四角な穴がぽかりとあいていた。

「畜生！　どこの猫だ」

「野良猫よ。いつもこの辺をうろついてるの。食う物がないのよ」芸者は無関心な返事をしてまた平尾の女を殺した話に聞き入つた。

近藤はテーブルに顔を伏せて黙つて酒を飲みづけた。いつまで飲んでも酔わないようでもあり、もう充分に酔つてゐるようでもあつた。頭が割れるように痛くてひどく焦々していた。それは全く反省する力を失つた衝動的な心の状態であつた。酔いも一緒になつて彼はむしろ喘いでいた。

平尾は女を殺した事件を眞面目な顔つきで話し終り、女は案外に感動したらしくもなく、可哀そうねえと義務的な相槌をうつていた。

「ああ、女を殺したくなつた」

近藤はまた言つた。強迫観念のようにそのことばかりが頭を苛めていた。むしろ上海以来の混乱した気持、戦場生活に馴れていた心の状態がはめを外したちぐはぐな気持ちが、また人を殺すことによつて元の静かな状態に返れると思うのであつた。戦争があればいいのだ、火線に立つて一度忘我の境をくぐればいいのだ。それは恰度以前の倉田少尉の焦立しさであつた。唯彼はそれを女を殺すことに執着させてゐるだけであつた。

その時に芸者は座の静けさを救うように言つた。

「女を殺すなんてよくないわ」

「何がよくない」と近藤はすぐ応じた。

「だつて女は非戦闘員でしよう。それを殺すなんて日本の軍人らしくないわ」

この場合それは大変に生意気な言葉であり侮辱的であつた。近藤は反省の余裕もなく持つていた盃を投げつけた。盃は胸に当つて床に落ちた。女は狼狽して立ち上り、

乱暴するのいや！と叫んだが、近藤がテーブルの上の拳銃をつかんだのを見ると長い袂をひるがえしてドアの外に逃げた。

近藤は撃つつもりがあつたかどうか分らなかつたが、女が逃げ出したのを見ると発作的に指が引金を引いた。爆発の音は二度づいて起つた。女ははげしい悲鳴をあげて戸口から外へ走り去つた。

平尾がすぐに立つて彼の腕を脇の下にかかえ込み拳銃を奪つた。すると笠原が近藤の腕をぐッと強く抱きこんだ。銃子が倒れて床に落ち蠟燭も倒れて消えた。室の中はほとんど暗黒になつた。

「いかん、出よう」

笠原が近藤の腕をかかえたまま廊下に連れ出した。平尾はすぐ後につづいた。

平尾は弾丸は当らなかつたと思つた。詫びて、勘定を済ませて出ようと思つていた。廊下に出ると小卓の上に一本の蠟燭がともつていた。笠原は引きずるようにしてそこを通り過ぎた。後につづいた平尾はその時足下に点々と落ちている血が黒く光つているのを見た。すると彼は改めてはげしい狼狽を感じ、すぐに笠原の背に顔を寄せて言つた。

「当つたらしいです。血が落ちてます。早く出ましょう」

家の奥の方で何とも名状しがたいはげしい女の悲鳴がつづいていた。二階の客が階段を下りて来る足音がした。二人は近藤の両腕をとつたまま急ぎ足で中庭に出た。

「どうしたんだ。おい、どうしたんだ」

上の窓から首を出して将校らしい者が呼んだ。しかし下からは答えないですぐに表門を出た。追つて来る者はなかつた。彼等はやがて真暗な中山路のしんと静まつた鋪道に出た。

「伍長殿、すみません。御迷惑かけました」

彼は捕えられた腕を静かに放しながら弱々しく詫びた。

「馬鹿！懲罰でも食つたらどうするんだ」笠原は低いきびしい声で言つた。「まあいい、お前は静かにしてろ、何とかなる」

それから平尾に向つて、たしかに血が落ちていたが、どこへ当つたろうかと訊ねた。負傷の場所は平尾にも分らなかつたが、走つて奥まで行つたし泣き声もしていたから大したことはあるまいと答えた。

「平尾、すまなかつた、許して呉れ」

近藤は泣いているような弱々しい口調であつた。

彼等は星明りの暗い大通りを黙つて歩いて帰つて來た。道の片側にまた新しい火事が物凄く燃え上つていたが人は一人も居なかつた。彼等は熱い火照りにあおられながら黙々と火事の傍を通り過ぎて行つた。市政府の衛門には歩哨が暗い木かげにじつと影のように立つていた。

「誰か！ 誰か！」

「笠原伍長、ほか二名」

よろし、と歩哨は口の中で言つた。三人は門に入つた。驢馬が破れた笛のようぐうがあがあとうつろな嘶き方をしていたがどこにつながれているかは分らなかつた。

「まあ、今晚は静かに寝るがいいや」伍長はなだめるように穏やかな声でひそかに言つた。「あまり気にするな」

「は、御迷惑かけました。済みません」

「誰にも饒舌るなよ」

彼はそう言いおいて刀を鳴らしながら大股に自分の部屋へ入つて行つた。